様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６６７９

研究課題名（和文）19世紀初頭イギリスにおける地方政党政治史―地方ホイッグを中心に―

研究課題名（英文）Provincial Whiggism in Early-Nineteenth-Century Britain

研究代表者
正木　慶介（Masaki, Keisuke）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：００７５７１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究期間中の主だった成果は以下の通りである。まず、報告者は単著（英語）の出版契約をEdwin Mellen Pressと結び、加えて、日本語論文１本を出版した。また、英語論文を完成させた。これは、イギリス政治史における最も権威ある学術雑誌の一つであるParliamentary History誌（Wiley-Blackwell刊）の査読を通過し、2018年6月にvol. 36, issue 2にて出版される予定である。その他、書評の執筆を行い、多数の口頭報告（英語・日本語）を行った。また、複数回に渡り渡英し、公文書館等でリサーチを行った。

研究成果の概要（英文）：I made a contract with Edwin Mellen Press to publish a book, the title of which is The Cult of Fox in the Early Nineteenth Century. I published an article in a Japanese peer-review journal, Shikan [Historical View], vol. 175 (2016, pp. 57-74). The title of the article is ‘The Concentric Society and Local Whigs in Liverpool in the Early Nineteenth Century’. I also sent an article, ‘Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th Century Britain’, to Parliamentary History, one of the most authoritative peer-review journals in British History. The article will be published in the journal in 2018 (probably in the vol. 36, issue 2). I also wrote a review of a book and gave many papers both in Japanese and English at academic conferences. In order to complete articles and papers, I did archival research several times in the UK.

研究分野：近代イギリス政治史

キーワード：ホイッグ　地方政党政治史　市民社会

１．研究開始当初の背景

19 世紀初頭のイギリス議会では、現代イギリス政治の代名詞ともいえる二大政党政治の枠組みが根付き始めていた。すなわち、フランス革命と産業革命という国内外の二つの大きな政治的・社会的変動の影響を受け、議会における多くの争点が、ホイッグ党(後の自由党)とトーリ党(後の保守党)という互いに対抗する勢力の間で議論されるようになったのである。

19 世紀イギリス政治史を検討する先行研究において、議会政党政治史研究は長い伝統があるが、特に 1990 年代以降、地域史や社会史への関心の高まりを背景に、議会における二大政党政治の展開が地方政治にどのような影響を与えたかを解明することが重要な課題の一つとして認識されるようになった(そうした研究の端緒の一つとして、Jon Lawrence and Miles Taylor (eds.), *Party, State and Society: Electoral Behaviour in Britain since 1820*, Ashgate, 1997)。しかし、ほとんどの先行研究は、1832 年に成立した、幅広い中産階級への選挙権付与と議席再配分を中心とする改革立法である「第一次選挙法改正」以降の地方政党政治に焦点を定めており(例えば、Philip Salmon, *Electoral Reform at Work: Local Politics and National Parties, 1832-1841*, The Boydell Press, 2002)、それ以前の時期の地方政党政治史研究は、イギリスのみならずわが国でもいまだ初期的な段階にある。

こうした 1832 年以前・以後での研究状況の非対称性は、1832 年以前が地方政党政治の発展にとって重要でなかったことを意味しない。むしろ、この時期は、二大政党政治の萌芽的段階という点で、また、多様な政治的・宗教的・経済的改革問題が議会内外で大きな議論を呼び「公論」が重要な影響力を持ち出した点で、無視できない重要性を帯びている。

よって、19 世紀初頭のイギリス地方政党政治史研究は、先行研究の残した大きな課題として捉えられるべきである。そこで報告者は、博士論文（2016 年 6 月にエディンバラ大学に提出）においてトーリに焦点を絞り 1815 年から 1832 年の地方政治を多角的に検討した。具体的には、出版印刷物に表れた政治理念や、政治クラブ、選挙、公的集会、都市自治体といった多様な場における政治行動を分析し、リヴァプールやエディンバラなど複数の都市におけるトーリ政治を比較検討した。この結果、議会政治と似た党派対立構造が多くの地域で見られたこと、その一方で、理念や組織形態の点では地域ごとにかなり多様性があったことを両面強調して論じた。

報告者の博士論文は、地方ホイッグに関する考察が不十分であった点で課題を残した。そこで報告者は、博士論文以後の研究テーマとして、ホイッグの側から地方政党政治史を検討し、両党に目を配ったよりバランスの取れた 19 世紀初頭のイギリス地方政党政治の実態を明らかにすべきであると考えるに至った。当時の様々な改革法の達成に議会ホイッグは大きな役割を果たした。彼らを支持する地方ホイッグは地域の側からこの達成をどう支援したのか。これを考察したい。

なお、報告者は、エディンバラ大学に提出した修士論文や同大学博士課程での最初の研究報告で、複数の地域におけるホイッグ政治とトーリ政治を比較分析することで、本研究課題を進める上での重要な知見を得ることができた【Keisuke Masaki, ‘The Cults of William Pitt the Younger and Charles James Fox: A Study of Party Political Clubs in their Urban Contexts, 1812-1822’, Annual History Postgraduate Seminar, 於エディンバラ大学、2012 年 3 月 2 日(英語による口頭報告)；Keisuke Masaki, ‘The Party Clubs in Liverpool and Manchester from 1812 to 1832: A Comparative Analysis’, MSc Dissertation(修士論文), エディンバラ大学、人文・社会科学部、歴史・古典・考古学科(歴史)、2011 年 8 月(英語による修士論文)】。これを土台とし、報告者はイングランド西部チェシャ州(及び州都チェスター)における地方ホイッグを政治クラブの観点から検討し、投稿論文を執筆した【正木慶介「チェシャ・ホイッグ・クラブ―1820 年代イギリスにおける地方ホイッグと議会改革―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(早稲田大学大学院文学研究科)第 60 輯、第 4 分冊、69-82 頁、2015 年】。この研究を通じ、中央と地方の政党組織は、現代政党政治に見られるような「公式の」財的コネクション・パトロネジ・命令系統では統合されてはおらず、地方ホイッグは独立した立場から改革運動を支援・展開していたということが具体的に明らかにされた。

２．研究の目的

本研究の目的は、イギリスのみならずわが国でもこれまでほとんど検討されてこなかった、19 世紀初頭イギリスにおける地方政党政治を、地方ホイッグを中心に考察することにある。この研究を通じ、議会における二大政党政治の展開が地方政治に与えた影響の一端を解明したい。

本研究は、リヴァプール、チェスター、エディンバラの三都市におけるホイッグの政治運動に注目し、それを比較分析する。その際、議会や議員の目線から捉えられた地方政治ではなく、地方政治家や地方新聞・地方政治組織など、地方の側の目線を重視する。本研究により、地方ホイッグが、議会内外で争点となった多様な全国的改革問題をどのように受け止め、それに対しどう主体的に行動したのか、そして、結果的に諸改革法の成立にどのように貢献することとなったのかが具体的に明らかにされるはずである。

３．研究の方法

研究視角として、以下の三点をあげる。第一に、リヴァプール、チェスター、エディンバラの三都市で刊行されたホイッグ系出版印刷物を分析し、地方ホイッグの政治理念を析出する。第二に、リヴァプールとエディンバラにおいて地方ホイッグが組織した政治クラブを考察する。第三に、上記三都市におけるホイッグの選挙政治に検討を加える。

以上を可能にする方法として、研究期間中に、数度渡英し、公文書館や図書館にて史料収集・分析を行う。また、イギリスおよび日本で論文投稿と口頭報告を行い、研究成果を発表する。研究上の困難に直面した際は、エディンバラ大学博士課程で指導を受けた歴史学者と緊密に連絡を取り、さらに報告者がこれまで築いた国際的な研究者ネットワークを活用し問題の解決を図る。

４．研究成果

2015 年度研究成果

2015 年度の研究報告について、論文発表、口頭報告、海外でのリサーチに分けて報告する。

まず、1812 年にリヴァプールにて設立された改革派地方政治結社である「同心協会」（Concentric Society）に関する分析を日本国内外で行い、学術雑誌の形にまとめ、『史観』第 175 冊（2016 年 9 月、早稲田大学史学会刊、57-74 頁）より発表した。表題は「19 世紀初頭イギリスにおける地方政治団体：リヴァプールの「同心協会」を中心に」とした。具体的には、同心協会を組織とアイデンティティの観点から考察することで、議会政党と地方政治団体の関係を明らかにした。結論として、以下の二点を強調して論じた。①同心協会は、プラグマティックに政策決定を行う自発的結社であったが、議会ホイッグとの連携を強化する中で「地方ホイッグ」としてのアイデンティティを獲得していった。②議会改革の達成を最終目標とする同心協会にとって、改革派議会政党であるホイッグ党との協調は欠かせないものであった。次年度の研究成果の項に記す単著に、この研究成果を盛り込む予定である。

次に、口頭報告についてである。2015 年度は、リヴァプールの都市政治について、市長選挙、公的集会、都市自治体の観点から分析を進め、二つの口頭報告を行った。まず、市長選挙に関して、イギリス革命史研究会の 2016 年例会（3 月 25 日；於明治学院大学）で「19 世紀初頭ブリテンにおける議会政治と地方政治の連関：リヴァプール市長選挙（1815-1832）」という表題で口頭報告を行った。また、同じテーマについてだが、力点と内容を変えて、日本西洋史学会第 66 回大会（5 月 22 日；於慶應義塾大学）にて、「19 世紀初頭イギリスにおける地方政党政治：リヴァプールにおける市長選挙を事例に」という表題で報告を行った。二つ目の報告では、19 世紀初頭にリヴァプールで行われた市長選挙と地方二大政党政治の関係を分析した。具体的には、先行研究が、この時期に自治都市の寡頭政に対する抵抗運動と議会改革運動が連動し大きな勢力が形成されたと論じてきたのに対し、本報告では、リヴァプールにおいて、地方代表制度改革問題をめぐり、地方ホイッグが合意形成に失敗し、市長選挙でも地方トーリに勝つことができなかった点を強調した。こうした知見をもって、先行研究が強調する「連動」の程度や有無について、地方政治の側から再検討していく余地があることを指摘した。

最後に、海外の研究機関で行ったリサーチについて報告する。まず、2016 年 2 月 22 日から 29 日の期間に渡英し、ロンドン郊外のキューにある The National Archives にてリサーチを行った。具体的には、19 世紀初頭のリヴァプール改革派の指導者の一人でユニタリアン派の牧師でもあったウィリアム・シェパードの書簡を閲覧・分析した。また、翌月 6 日から 11 日の期間に再び渡英し、エディンバラの National Library of Scotland でリサーチを行った。ここでは主に、日本ではアクセスすることのできない新聞、雑誌、小冊子を閲覧・分析した。両リサーチで得られた分析結果をもとに、次年度の研究成果の項に記す単著の企画提案書（proposal）を作成した。

2016 年度研究成果

2016 年度の研究報告について、単著出版契約、口頭報告・論文発表、書評の発表、海外での学術的活動に分けて以下に報告する。

まず、*The Cult of Fox in the Early Nineteenth Century* というタイトルの単著の出版契約を、Edwin Mellen Press (Lewiston, NY; Lampeter, Wales)と結んだ。18 世紀末からホイッグ党の指導者となったチャールズ・ジェイムズ・フォックスが、1806 年に死去してもなお議会ホイッグ政治に影響を与えたことはよく知られている。本書では、こうした「フォックス崇拝」とホイッグ政治の関係を、議会外政治の文脈において再検討する。特に、ロンドンおよび多くの地方都市で組織されたフォックス生誕記念晩餐会やホイッグ系結社に注目し、フォックス崇拝の観点から、議会ホイッグ政治と各地域におけるホイッグ政治を比較検討し、議会外ホイッグの政治理念や政治行動を明らかにする予定である。

次に、2016 年度は多数の口頭報告を行ったが、上記単著の内容に大きく関わるものとして、2016 年 6 月に Political Economy Tokyo Seminar (University of Tokyo)で行った英語での口頭報告をあげたい。表題は、‘Tory Clubs and Societies: Club Government and Parliamentary Sovereignty, c.1815-1832’である。本報告では、19 世紀初頭において多くの都市で設立されたトーリ系結社を網羅

的に検討し、結論として以下の二点を強調した。第一に、トーリ系結社は各都市で重要な政治運動を行ったが、一方で、議会主権の考えが深くイギリス社会に浸透していたため、そうした運動は、中央議会の審議過程に過度に介入するところまでは発展しなかった。第二に、こうした自制的な結社の政治文化は、ホイッグ系結社にも共有されたものであった。この口頭報告で得られた知見を土台の一つとし、地方ホイッグをより総合的に理解すべく、その敵対者であった地方トーリについてさらに考察を進め、'Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th Century Britain'という表題の論文を完成させた。この論文は、イギリス政治史における最も権威ある学術雑誌の一つである *Parliamentary History* 誌（Wiley-Blackwell 刊）の査読を通過し、2018 年 6 月に vol. 36, issue 2 にて出版される予定である。

加えて、2017 年 7 月 8 日に開催される早稲田大学西洋史研究会 70 回大会（於早稲田大学）で口頭報告することも決まっている。表題は、「フォックス『崇拝』と政治的晩餐会」である。本報告では、19 世紀初頭に複数の都市で開催された「フォックス生誕記念晩餐会」と、ロンドンおよび地方都市のホイッグ政治の関係について考察する。具体的には、以下の二点を強調して論じる予定である。第一に、地方ホイッグエリートは、1806 年に死去した党指導者 C・J・フォックスの誕生日に公的晩餐会を開催し、議会改革の必要性を院外の有力者に訴え支持を増やそうとした。第二に、しかし、彼らの改革案は、改革派中産階級にとって穏健すぎるものであり、後者はホイッグエリートから離れ独自の運動を展開することとなった。

また、19 世紀初頭における地方ホイッグの政治運動をより長期的なコンテクストに置き考察することを目的に、Angus Hawkins, *Victorian Political Culture: 'Habits of Heart & Mind'* (Oxford: Oxford University Press, 2015)の書評を執筆した。本書は、19 世紀のイギリス政治に対する大きな見取り図を提供する。強調されるのは以下の二点である。第一に、ヴィクトリア期の政治文化は、「過去」の党派的利用、道義性に対する訴え、共同体の観念によって構成された。この政治文化は、エリートのみならず、急進主義者や社会主義者にも共有された。第二に、イギリスでは、革命と混乱を経験した大陸諸国と異なり、19 世紀を通じ、漸進的かつプラグマティックに、混合政体から議会政体、さらに政党政体へと統治の枠組みが推移した。書評は、*East Asian Journal of British History*, vol.6 より 2017 年 6 月に出版される予定である。

最後に、海外での学術的活動として、2017 年 1 月 4 日～6 日に行われた BSECS (British Society for Eighteenth-Century Studies) が主宰する年次学会（第 46 回）にて口頭報告を行った (St Hugh's College, University of Oxford)。この国際学会に Edwin Mellen Press の編集者が出席していたことが縁で研究に興味を持ってもらい、上記単著の出版契約につながった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① <u>正木　慶介</u>「19 世紀初頭イギリスにおける地方政治団体―リヴァプールの「同心協会」を中心に―」『史観』（早稲田大学史学会）第 175 冊、57-74 頁、2016 年 9 月【査読あり】

② <u>Keisuke Masaki</u>, 'Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th Century Britain', *Parliamentary History* (Wiley-Blackwell), forthcoming, scheduled for publication in 37:2 (June 2018) 【査読あり】

〔学会発表〕（計　9 件）

① <u>正木　慶介</u>「地方トーリの政治理念―ナポレオン戦争終結以降の急進主義の展開を背景に―」、第 83 回京都大学西洋史読書会大会、於京都大学、2015 年 11 月 3 日【招聘あり】

② <u>正木　慶介</u>「19 世紀初頭ブリテンにおける議会政治と地方政治の連関：リヴァプール市長選挙(1815-1832)」、イギリス革命史研究会(2016 年例会)、於明治学院大学、2016 年 3 月 25 日

③ <u>正木　慶介</u>「19 世紀初頭イギリスにおける地方政党政治：リヴァプールにおける市長選挙を事例に」、日本西洋史学会第 66 回大会自由論題報告、於慶応義塾大学、2016 年 5 月 22 日【事前審査あり】

④ <u>Keisuke Masaki</u>, 'Tory Clubs and Societies: Club Government and Parliamentary Sovereignty, c.1815-1832', Political Economy Tokyo Seminar (University of Tokyo), 9 June 2016(英語による口頭報告) 【招聘あり】

⑤ <u>正木　慶介</u>「第一次選挙法改正と地方トーリ：リヴァプール、ブリストル、コルチェスターにおける 1831 年議会選挙を中心に」、中国四国歴史学地理学協会大会(2016 年度)、於岡山大学、2016 年 6 月 26 日【招聘あり】

⑥ Keisuke Masaki, ‘The Development of Local Tory Clubs and Societies: A Case Study of the Political Participation of Voluntary Associations in Early-Nineteenth-Century Britain’, Voluntary Action History Society’s 25th Anniversary Conference (University of Liverpool; Liverpool (UK)), 13-15 July 2016(英語による口頭報告)【事前審査あり】

⑦ 正木　慶介「19 世紀初頭のイギリスにおける政治的アソシエーションと議会主権：トーリ系政治結社の事例から」、早稲田大学史学会大会（2016 年度）、於早稲田大学、2016 年 10 月 15 日【招聘あり】

⑧ Keisuke Masaki, ‘Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early Nineteenth-Century Britain’, British Society for Eighteenth-Century Studies, 46th Annual Conference 2017 (St Hugh’s College, University of Oxford; Oxford (UK)), 4-6 January 2017(英語による口頭報告)【事前審査あり】

⑨ 正木　慶介「フォックス生誕記念晩餐会：ホイッグ主義と議会改革」、早稲田大学西洋史研究会 70 回大会、於早稲田大学、2017 年 7 月 8 日【依頼あり】

〔図書〕（計　1 件）

① Keisuke Masaki, *The Cult of Fox in the Early Nineteenth Century,* under contraction with Edwin Mellen Press (Lewiston, NY; Lampeter, Wales). ＊2019年3月31日までにbook manuscriptを提出することになっている【査読あり】

〔その他〕

ホームページ等

【書評】

① Keisuke Masaki, Book Review of Angus Hawkins, *Victorian Political Culture: ‘Habits of Heart & Mind’* (Oxford: Oxford University Press, 2015), *East Asian Journal of British History* (East Asian Society of British History), forthcoming in vol.6 (June 2017)

６．研究組織

(1)研究代表者

正木　慶介　　(MASAKI, Keisuke)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：00757172